

## デンマーク・子育て世代のケアとインフォーマルなサポートネットワーク

○青木加奈子（京都ノートルダム女子大学）、宮坂靖子（金城学院大学）

**1. 研究の目的** これまで、デンマークをはじめとする北欧諸国の子育てをめぐる家族研究では、公的機関が主導して進めてきた充実した子育て支援政策を背景に、インフォーマルなサポート資源に言及した研究はほとんどみられなかった。本研究では、「二人稼ぎ手、二人ケアラーモデル」(Ellingsæter & Leira eds.2006)を実現させているデンマーク社会において、インフォーマルなサポート資源が子育て中の親の仕事と家庭生活の両立に寄与しているかを検討することを目的とする。具体的には、子育て中の親たちはどのようなインフォーマルなサポート資源を持っているのか、そしてそれらをどのように活用しているのかという点に注目する。また、インフォーマルなサポートネットワークがコペンハーゲンを中心とした首都圏在住者と地方都市部在住者では違いがあるのかどうかも検討する。なお、本報告でのインフォーマルなサポート資源とは、子どもの親と個人的につながりがある人または集団で、親に代わり、あるいは一緒になって実際の世話を担ってくれる存在とする。以下では「サポート資源」を「サポーター」と表現する。

**2. 研究方法** 使用するデータは、報告者らが2016年より実施してきた子育て中の親を対象とした聞き取り調査によるものである。調査対象者の選定は10歳以下の子どもを持つ親とし、現地在住の知人を介して調査対象者を紹介してもらう機縁法を用いた。調査対象者は、コペンハーゲン調査(2016年2月～2018年5月、2023年2月)が女性12名、男性3名(うちペア調査3組)、デンマーク第2の都市オーフス調査(2023年1月～2月、8月～9月)が女性8名、男性3名(うちペア調査2組)であり、調査時に育児休業中の者もいたが、全員が仕事を持っていた。調査は日本語・デンマーク語の通訳を介して実施し、1組あたりの調査時間は約2時間である。

**3. 結果と考察** すべての調査対象者が、実際に活用しているか否かにかかわらず、インフォーマルなサポーターを確保しており、最初に名前が挙がるのは実親か義親であった。サポーターの一人として、親の新しいパートナーを挙げる調査対象者もいた。また、必ずしも母親ばかりに頼るということはなく、サポーターとして父親が登場することも珍しくなかった。その他のサポーターとして、きょうだい、オバや姪等の親戚、自分の友人、勤め先の同僚、子どもの友人の親、近所の人、ベビーシッターが挙げられた。

主たるサポーターである実親や義親からの支援は、多くが頻度や回数を決めて行われており、総じて取り決めた以上のサポートを受けていなかった。不測の事態が生じた場合には、親以外のサポーターに依頼し、短い時間だけ子どもの世話を願うという調査対象者が多かった。つまり調査対象者たちは、いくつか異なるサポーターを確保しており、必要とする場面によって使い分けていた。これは、親族以外のサポーターにバリエーションがみられた首都圏でより顕著であった。

公的機関が主導となり、カップルが共にフルタイムで働きながら、互いに協力して子育てができる社会環境を整えてきたデンマーク社会であっても、それだけでは埋めることのできない子育ての「スキマ時間」は発生してしまう。デンマークの親たちはインフォーマルなサポートネットワークを駆使しながら「スキマ時間」をカバーし、仕事と家庭生活の両立を遂行しているのである。

**4. 付記** 本報告は、JSPS 科研費 22K02146 (研究代表者: 宮坂靖子)、JSPS 科研費 20H01567 (研究代表者: 山根真理愛知教育大学教授)、JSPS 科研費 15H05148 (研究代表者: 宮坂靖子) の助成を得て実施した調査研究成果の一部である。各調査に先立ち、「金城学院大学ヒトを対象とする研究に関する倫理審査委員会」「愛知教育大学人を対象とする研究倫理審査委員会」「京都ノートルダム女子大学研究倫理審査委員会」の研究倫理審査を受け承認を得た。

文献: Ellingsæter, A. L. and Leira Arnlaug eds., *Politicising Parenthood in Scandinavia*, Bristol, The Policy Press, 2006.

(キーワード: デンマーク、子育て、インフォーマルなサポーター)